

# 明治維新时期「国語」創成への歩み

——「漢文」「漢字」をめぐる一断面——

大岡 玲

## 1. はじめに

バベルの塔の故事を引くまでもなく、人間がコミュニケーションによって素早い意志の統一を図るには、使用言語の一致が欠かせない。近代における「国民国家」においては、国民の意志の統一によって「国家」という仮想であり実体でもあるシステムを動かす、というのが大前提だった。そのためには、全国民共通の「国語」を創設し、すみやかな意思の疎通を行うことが、「国家」としての最重要課題のひとつであった。フランス革命以降に「国民国家」創設の基準となったこの考え方は、明治維新时期の日本でも為政者に痛切に意識されていたとおぼしい。そして、その痛切さは、「国語」の土台となるべき「日本」独自の言語が存在しない、という彼らの意識によって、生々しい痛みをともなった焦りへと先鋭化していった。

現代の「常識」で明治維新时期の指導層のそうした考えを眺めると、うまくのみこめない感覚に襲われる。当時の日本で通用していた言葉を、そのまま「国語」の骨格として採用し、時代の要請に合致した形に改変していけばいいだけの話ではないか、という風に思えてしまうからだ。ごく当たり前に、「国語」＝「日本語」という意識を持っている私たち、そして、ごく自然に、明治以前の「古典」から現在の「国語」に至る道筋に「日本語」の連続性を見ってしまう私たちの「常識」では、明治維新前後における指導層の苦悩はきわめて理解しにくいのである。

このあたりの消息について、社会言語学および言語思想史を専門とするイ・ヨンスクは、次のように述べている。

「近代日本においては、『日本語』という地盤が確固として存在した上に『国語』という建築物が建てられたのではない。むしろ、『国語』というはやかな尖塔が立てられた後に、土台となる『日本語』の同一性を大急ぎでこしらえたという方が真相にちかいだろう<sup>1)</sup>。」

「現実の言語にはさまざまな地域的・階層的・文体的変異がかならずある。しかし、

たとえそうした変異性がいかにばらばらなものであったとしても、それをまさに『変異』として把握できるのは、背後に共通で同一の尺度があるからこそである。つまり、『国語』の成立にとって、もっとも根本的なのは、現実には、どんなに言語変異があったとしても、それをこえたゆるぎない言語の同一性が存在するという信仰をもつかどうかである<sup>2)</sup>。」

「近代日本の国語意識のありかたをあきらかにしようとする際に、『国語』概念の成立過程が『日本語』の同一性そのものの確認の作業と平行していたことは、しばしば見過ごされがちである<sup>3)</sup>。」

「日本の『言語的近代』は、そもそも『日本語』という言語的統一体がほんとうに存在するのかという疑念から出発した。『国語』とは、この疑念を力づくで打ち消すために創造された概念であるとさえいえる<sup>4)</sup>。」

実際、幕末から明治にかけての日本の言語状況は、書き言葉と話し言葉の乖離がはなはだしく、その上、書き言葉にも何段階かの階層的分離が存在した。そして、日本国内で使用されているこれら種々の言語形式に対して、すべてを包括的に「日本語」として捉える視点はなかったといっている。もう少し具体的に江戸末期の言語状況について言うなら、文言は本来は外国語である「漢文」と、漢文訓読由来の和漢混淆文、仮名文字主体の和文（和歌・俳句、女性向けの文章など）、それに俗な会話文（十返舎一九の『東海道中膝栗毛』のような滑稽本や山東京伝の洒落本『通言総籙』、草双紙などに見られるもの）が並行的に使用される「三層 + a」構造であり、口語はといえば、長く続いた藩制度によって固着化が進んだ多数の地域語・方言が存在し、文言と近接関係にある武家言葉がかろうじて統一口語への気配を宿しているといったものだったといえるだろう。つまり、「日本の言葉（たち）」は厳然とあるにもかかわらず、「日本語」はいまだ存在していないということであり、このような状態から「日本語の同一性」、それも文言と口語が統一された「言文一致」の「国語」を構築していく作業は、ほとんど空想的といっている想像力の試行錯誤を、必然的にともなうことになった。本稿では、古代以来の日本の言語の歴史を踏まえつつ、明治維新时期のそうした試行の具体的な事例を二、三とりあげ、現代の「国語」にも底流として存在する問題を論じたいと考えている。

## 2. 「漢文」・「漢字」への反発

「日本語の同一性」を求める志向の最初の表れは、「漢文」および「漢字」への「憎悪」という形をとることになった。その代表例としてまず挙げねばならないのは、一八六六年（慶応二年）に將軍徳川慶喜に上申された（草稿のみで実際には上申はされなかったとの説もある）建白書、「漢字御廃止之儀」<sup>5)</sup>だろう。建白者は、前島密。近代日本の郵便制度の父であり、その制度の名称を考えるに際して「郵便」という和製漢語を創出したほどの前島であるのだ

が、幕末期においては、幕府開成所<sup>ほんやくかた</sup>反訳方として「漢文」と「漢字」が日本の教育を阻害し、ひいては「国家」の発展を妨げる可能性がある、という指摘を行ったのだった。

「漢字御廃止之儀」の冒頭部分は、このようなものだ。

「国家の大本は国民の教育にして其教育は士民を論せず国民<sup>ひろ</sup>に普からしめ之を普からしめんには成る可く簡易なる文字文章を用ひさる可らず 其深遠高尚なる百科の学<sup>しんえんこうしやう</sup>に於けるも文字を知り得て後に其事を知る如き艱<sup>かんじゅうえん</sup>澁<sup>じゆ</sup>迂遠なる教授法を取らず<sup>すべ</sup>渾て学とは其事理を解知するに在りとせざる可らずと奉存候 果して然らば御国に於ても西洋諸国の如く音符号（仮名字）を用ひて教育を布かれ漢字は用ひられず終には日常公私の文に漢字の用を御廃止相成候様にと奉存候」（新字新かな；ルビ 筆者）<sup>6)</sup>

「漢字廃止」を訴える文章が、難解な漢字に満ちているという皮肉はさておいて、国民に広く教育を行き渡らせるためには、むずかしい漢字を廃して、アルファベットのような「音符号」、すなわち仮名文字を使って学問を教えるべきである、というのがここにあらわれた前島の主張ということになるだろう。さらにこの部分のすぐあとには、漢字をおぼえ漢文を駆使することが学問だという当時の一般常識を、「漢字廃止」によって駆逐できるという「漢学」批判が続く。ほかにも、アメリカの宣教師が中国を訪れた際、子供たちが大声で「経書等の古文」を「素読」している様子に驚愕した、というエピソードを記し、中国の人民が「野蠻未開の俗に落ち西洋諸国の侮蔑する所」となったのは、ひとえに漢字という「形象文字に毒」されたためなのだ、といった、どこか「坊主憎けりゃ」風の議論まで展開している<sup>7)</sup>。

前島のこの思考の背景にくっきり読みとれるのは、この建白書より四半世紀前に起こったアヘン戦争が日本に与えた衝撃、そして嘉永六年（一八五三年）のペリー来航（前島の後年の自伝『鴻爪痕』にも、その時受けた大きなショックについての記述がある）だろう。当時すでに千三百年に及ぶ歴史を持っていた「科擧」制度を基盤とした、中国の学問・教育体制の硬直化と、儒教一辺倒とっていい学びの閉鎖的志向によって、中国が西欧の学問思想や技術革新をうまく受けとることができなかつたこと。それこそ、かの国が屈辱的な運命をたどらねばならなかつた根本原因なのだ、という恐怖が、この建白書にはにじんでいる。

そして、その恐怖はひるがえって日本の停滞状況への警鐘となる。前島は、「御国人の知識此の如くに下劣にして御国力の此の如くに不振に至りたるは遠く其原因」（日本の教育水準が低く、国力がふるわぬのは）は、「中古人の無見識なる彼国の文物を輸入すると同じく此不便無益なる形象文字をも輸入して竟に国字と做て常用」（ヤマト朝の人々が中国の文物と同様に、漢字を無分別に輸入して国字として常用）した「其素の毒を茲に発したるなりと痛憤に」堪えない、と、古代の人々に対する八つ当たりにも近い批判を展開し、さいわい日本独自の発明として、アルファベットに比すべき仮名文字があるのだから、それをこそ使うべきであり、漢字のような「不便無益」で習得に時間のかかるものなど捨ててしまわねばならない、と断言する<sup>8)</sup>。加えて言えば、言語においてもインフラにおいても「時間のかか

る」ことのデメリットを憂えたことが、郵便制度の充実に邁進する前島の大きな動機になったのかもしれない。

ただ、前島にしても仮名の出自がまさしく漢字であるという皮肉を意識しての内心忸怩はあったようで、建白書中では括弧付きで、そのことについて古来いろいろ議論もあるが、本題とは関係ないから問題にしない、と少々弁解めいたことも述べている。また、「漢字」は廃しても、「漢語」は「仮名字」をもって表記すればいいのだから、捨てるには及ばない、英国がラテン語を自国語の綴り方で書き記すのと、それは同じことであるからだ、という主張もしている<sup>9)</sup>。つまり前島は、近代ヨーロッパの言語がラテン語の遺産を消化していった道筋を、日本語にもたどらせたいという明確なヴィジョンを持っていたのである。

前島に代表される「漢文」「漢字」、そして「漢学」からの脱却を目指そうとした人々は、容易に想像できることだが、江戸期における「知」の基盤である「漢学」を年少時に学びつつも、青春期にいたった時点で蘭学・洋学の洗礼を受け、自らの知的土壌を刷新した新しいタイプのエリートたちだった。そして、西欧の学問に触れた彼らの多くは、程度の差こそあれ前島と似通った意識を共有していたとおぼしい。のちに初代文部大臣になる森有礼が主唱し、明治六年（一八七三年）に創設された「明六社」はそうした洋学系知識人（そのほとんどは明治新政府の官僚）の、いわば学会であり知的サロンでもありというもので、若い熱気をはらんだ彼ら（初代「社長」の森が、そもそも二十六歳という若さだった）の議論は、翌年刊行された機関誌「明六雑誌」に掲載された論考からうかがい知ることができる。そして、その創刊号には、西周の「洋字ヲ以テ國語ヲ書スルノ論」<sup>10)</sup>が載っているのだが、これは前島密の論よりもさらに過激な論旨である。

西のこの論文の表題にある「国語」は、その後の国家意識に支えられた「国語」とどの程度の相同性を持つものであるか定かではないが、この語が公に登場した最も初期の例のひとつだろう。西の論も、前島の建白書と同様に、「人民ノ愚」を嘆き、日本の文化的発展を妨げる最大の原因は漢字であると論じる。そして、西は前島よりもさらに踏みこんで、「漢字を減定」といった、いわば姑息な手段で対応するのではなく、文字自体をローマ字にしまえばよい、と述べるのである。ローマ字はひとつひとつの音声を忠実に表記することができ、母音と子音が合体した形でしか表記できない仮名文字よりも、その点ですぐれているというのである。これは、あきらかに英語をはじめとする西欧語を、日本の言葉に交せてそのまま表記することを想定した議論だろう。

西は、書字をローマ字にする利益を十項目に分けて説いていく。それをまとめてしまうなら、以下のようなことになるだろうか。曰く、子供たちの外国語習得が容易になり、また「言フ所書ク所ト其法ヲ同ウス」、すなわち、書いたものをそのまま読むことができ、その逆も可能になる。つまり、言文一致が実現できる。翻訳も簡単になり、学術用語はわざわざ漢語にせず音のまま書けるし、おぼえられる。そして、ローマ字化が実現すれば、「欧州ノ万事

悉ク我ノ有トナル」ので、「彼（欧米を指している）ノ膽ヲ寒ヤスニ足ラン」、要するに欧米の文明の所産をすべてモノにできるから、ヤツらの肝を冷やすことができるじゃないか。と、いうのが彼が言うところの「利」である<sup>11)</sup>。

西周のこの文全部を通底して流れているのは、渴望とっていいほどの欧化志向であり、俗な表現をするなら、西欧になめられたくない、という必死の自尊心である。だが、彼の議論には、現在の観点で見ると、浅薄とっていい想像力の欠如、言語を変換するという行為に潜む巨大なリスクについて、ほとんど一顧だにしないという幼さが目につく。彼が挙げる「利」と相反する「國語」ローマ字化の「其害」は、筆と墨の店がつぶれるとか、紙の製造法を変える面倒があるとか、漢学者・国学者の新たな就職先を考えなければならない、といった愚にもつかぬ事柄のみなのである。しかも、「Yorosisi」と表記して、それを「ヨロシシ」とも「ヨロシイ」とも読ませる、あるいは「Atuku」は「アツク」（江戸なまり）でも「アツウ」（京なまり）でもいい、といった、それこそ言文の不一致もあった<sup>12)</sup>。

もともと、西周はこうしたローマ字化推進を唱える一方で、今日にも残る幾多の翻訳語、たとえば「理性」「科学」「芸術」「技術」「主観」「客観」などなど、私たちにあって今や欠くことのできない漢語由来の言葉を創出したのだから、事態は複雑である。やはり「明六社」のメンバーであった福沢諭吉も、漢字の使用はなるべく控えていくべきだという論者ではあったが、幕末にベストセラーとなったその著作『西洋事情』においては、当時の日本には存在しない概念を意味する英語を、苦心の末に漢語に移しかえている。例をあげるなら、「Society」を「人間交際」と訳している<sup>13)</sup> ことなどがそれだが、より平俗でイメージが湧きやすい用語にすることで、無用に難解な新造語にならないよう心がけつつ、それが漢字であり漢語であるという条件からは踏みだしていないのである。

当時の知識人たちが、「漢字」「漢語」を廃すべきであると主張しつつ、同時にその主張とは矛盾しているとも見える漢語由来の「翻訳語」を作らなければならなかった事情の背後には、少しおおげさに表現するなら、古代の段階でヤマト朝廷が漢字という書字を移入して自らの言語を筆記した際に背負ってしまった一種の「呪い」が横たわっているのである。本稿の論旨をいくぶん先回りして触れるなら、漢語の新しい組み合わせによって欧米の概念を日本の言葉に翻訳するというこうした行為の集積が、維新期の欧化知識人が危機感を抱いていた民衆の教化を、思いのほか急速に進めた側面がある。かつまた、明治時代後半にかけて徐々に形を整えていく「国語」に、これらの翻訳語が与えた影響は、まことに深甚なものがあつたと言わざるをえないのである。が、そこに歩を進める前に、ヤマト朝廷期からの日本の言葉における「呪い」の歴史に簡単に触れておくことにする。

### 3. 日本古代における「漢文」・「漢字」の移入と、その後の歴史的経緯

文字の記述法は、人間の歴史においてそれほど数多く開発されてきたわけではない。後発の文明は、先発の文明が使用している文字や記述法を借りることによって、みずからの言語を筆記するケースがほとんどだ。つまり、自言語を他の文明圏が使用している既存の書字方式で記すことになる。本邦の「文」の歴史もまた、まぎれもなく後発文明の形式を備えている。ヤマト王朝の成立期から飛鳥・奈良朝にかけての頃、日本は先進文明国である中国に熱心に学び、当然ながらかの地の言語に習熟する道を歩もうとした。多くは朝鮮半島からの渡来人によって、あるいは遣隋使・遣唐使という直接的な交流の中でもたらされた中国大陸の文化・文明に、おそらく私たちの先祖はまばゆい光輝を感じただろう。法制度を借用し、都を唐の都を模して作り、公用文書は一所懸命修得した漢文で綴られた。現存する最古の漢詩集『懷風藻』が撰されたのは八世紀の半ば。収められた詩には、七世紀半ばの近江朝の歴史を彩った大津皇子や大友皇子といった皇族の詩もある。もちろん、模倣というか、あきらかに類似した作風の詩が中国本土に見られたり（謀反の疑いで刑死した大津皇子の作とされる「臨終」が、その代表）、技巧的に稚拙なものも散見される。しかし、中国本土の文明に参加しようとする強い熱意が、集全体からひしひしと伝わってくる。

少々乱暴な表現をするなら、ヤマト王朝初期の宮廷には、バイリンガル気分が横溢していたということになるだろうか。英語グローバリズムに席卷されている現在の状況に引き写すなら、官庁の書類はすべて英語。憲法や刑法・民法も英語で、作家や詩人は競って英語小説や英詩を書くというような状態である。そんな様子を想像してみると、なんとなく当時の「熱狂」が伝わってはこないだろうか。しかし、そうした外来文明への熱狂の中で、同時に日本古代の知識層は、「やまとことば」を漢字で表現するという難事に、果敢に挑戦していたのである。すなわち、自分たちが日頃使用している口語を書字によって記録に落としこむために、漢字の音のみを借用して「万葉仮名」を作成するというのがその難事業だった。この方向性はやがて、漢字の持つ意味に対応するヤマト言葉の音を、「和訓」としてその語に与える、つまりたとえば、「山（サン）」という語を漢音でそのまま「サン」と発音するのみならず、「やま」とも読む、という方式の開発につながった。そうした努力の結果として、私たちの先祖は、ヤマトの言葉とはまったく異なった文法体系を持つ漢文をそのまま原語として読むのみならず、漢文訓読という独特の「解釈方式」を編みだしたのだった。日本と同様に、中国文明とその使用言語を受け入れた朝鮮半島や東南アジアといった他の文明圏では、こうした「解釈方式」に類似したやり方の萌芽はあったものの、わが国の「訓読法」ほど永続的かつ強固に定着したものは存在しない。そして、この方式こそがその後の日本語の多重構造化の出発点だったのである。

ここで「漢文訓読」をさらりと「翻訳法」と書かずに独特の「解釈方式」などともったいぶったのは、漢文を語順はそのままだに、返り点や送り仮名を付け日本語の語順にむりやり変える方式が、いわゆる翻訳とはかなり異なっているからなのである。中国文学者・高島俊男は、シリーズ・コラム『お言葉ですが…』の別巻四『ことばと文字と文章と』<sup>14)</sup>で、以下のよう述べている。

「日本人は（奈良・平安初期までは別として）漢語の文章を原文通りに読むことはできないので、初めから日本語に逐語訳して読んだ。日本人が『漢文』と言う時には、この逐語訳のことを指していた。いまそれを『漢文訓読』と呼んでいる。それを日本語の順序に書いたものを『書き下し』と言った。／英語にたとえて説明しよう。／Tom went to city yesterday. という文章があるとする。／これを英米人がどう読むかを日本人はまったく知らないし、気にもとめない。／Tom という字を『トム』と読む。went という字を『ゆけり』と読む。to という字を「へ」と読む。city という字を『市街』と読む。yesterday という字を『昨日』と読む。そして全体を、初めから日本語で「トムは昨日市街へゆけり」と読む。そしてこれを『英文』と言った<sup>15)</sup>。」

高島は「逐語訳」と書いているが、初めから日本語にしているにもかかわらず「英文」と呼ぶ奇妙さを考えるなら、訳ではなくて解釈法という方が至当かもしれないと思うがゆえに、私見では漢文訓読を「解釈方式」と呼ぶのである。いずれにせよ、まことに奇妙な話である。「子曰学而時習之不亦説乎」という原文に符号をつけ、まずは「子曰ク学ビテ而時ニ習フ（レ点）之ヲ 不（二点、つまり一点の符号のあとに読む）亦タ説（一点）バシカラ乎」と書く。さらに書き下し文で、「子曰く、<sup>し</sup>学<sup>び</sup>て<sup>ま</sup>時<sup>に</sup>之<sup>を</sup>習<sup>ふ</sup>、<sup>亦</sup>た<sup>説</sup>ば<sup>し</sup>から<sup>ず</sup>乎」という形にして、これも「漢文」すなわち「中国語」であるとしたのだから、現代的視点では独特すぎる考え方というほかない。なぜなら、書き下し文は、あきらかに「漢文」という外国語を「和文」の一形式として読みかつ記す形式にほかならない。にもかかわらず、古代以来江戸の終わりにいたるまで、どう見てもヤマト言葉交じりに奇妙に変形させた新造言語でしかないこの文体も含め、原文（白文）・返り点付加文・書き下し文を一括して「漢文」という外国語だと見なしたのだ。

「漢文」の「解釈方式」であると同時に「漢文」の範疇でもあるという、この漢文訓読が、やがてヤマト言葉と絡み合いながら和漢混交文を生みだし、明治期には普通文、いわゆる文語文の基礎になり、さらに現在私たちが日常使用している漢字かな交じり文になったわけで、漢文にここまでの深甚な影響を受けた文章語を持つ言語は、すでに述べたように他のアジアの言葉には見当たらない。高島が挙げている例をもうひとつ紹介してみよう。「やまへきをきりにいった」というのは、立派な現代の言葉だ。ルビで訓をふらずに漢字かな交じり文で書くと、「山へ木を切りに行った」となる。しかし、これをすでに引用した英語になぞらえるやり方で考えると、「mountain へ tree を cut りに go った」という風な、タレントのルー

大柴の喋りとそっくりの形になる<sup>16)</sup>。思わず吹きだしそうになるが、しかし、外来語を受け入れやすい日本語の特性は、このあたりにルーツがあるのかもしれない。

こうした歴史的経緯によって、古代から中世、江戸期に至るまでの期間、日本は、「はじめに」で記したように「三層+ $\alpha$ 」構造の「文言」文化を持つことになった。繰り返しになるが、まず古代の中国文言である「漢文」が最上層の記述言語として、公式文書や歴史書、知識人の日記などに使用される。そして、その「漢文」を訓読した「漢文訓読体」が、やまと言葉と融合しつつ「和漢混淆文」を形成。この第二層文体が自在に使われた作品を挙げるなら、『今昔物語集』のような説話集、『方丈記』『徒然草』といった隠者文学、そして『平家物語』などだ。第三層は、いうまでもなくやまと言葉、和文である。『古今和歌集』にはじまる勅撰和歌集の流れや『源氏物語』、『枕草子』といった女房文学がこれにあたるわけだが、しかし、二十世紀以降の日本文学史ではメインストリームとして認知されているこれらの和文作品群に使用されている「文」は、少なくとも近代以前（明治中頃までを含めてもいかもしれない）においては、作品としての評価とは別に、非公式的で、より私的なものだと見なされてきたのである。

もちろん、最上層の記述言語である漢文も、遣唐使が廃止されて以後、断続的に中国本土と貿易などの交流がありながらも徐々に関係性が希薄になっていく流れの中で、変質を遂げていくことになった。『日本書紀』が、神話も含んでのヤマト朝廷の歴史を、中国で使用されている文言とほぼ同等の漢文、すなわち正確な外国語で記述していたことに比べ、中世期に入る頃には、漢文は「」付きの「漢文」、日本語の文法に侵された「変体漢文」・「和化漢文」へと変貌していた。鎌倉初期の歴史書『吾妻鏡』や、武家の法令として定められた『御成敗式目』の文章を見れば、それが「漢文」で書かれながら正規の漢文法から大きく逸脱していることは一目瞭然である。

こうした同化の流れが続いていけば、やがて外国語としての漢文は、和漢混淆文のうちにゆるやかに吸収されていった可能性もあるのではないかと思われる。そうであれば、あるいはもっと早い時期に、私たちが現在使っているような漢字仮名交じり文が定着していたかもしれない。つまり、多層構造の文章語が数百年前の段階で、自然に単層になる筋道もありえたのではないか。それは、和文と漢文の併存を説明する際に例としてよく挙げられる、ラテン語とゲルマン系やアングロサクソン系の言語の融合の歴史に近づくということでもあるだろう。ラテン語に起源を持つロマンス系の言語、すなわちイタリア語、フランス語、スペイン語、ルーマニア語といった言葉は、俗化したラテン語という面を今日でもはっきり感じさせるが、英語やドイツ語はそうではない。ローマ帝国の支配下・影響下にあった時代以降、そして中世期にラテン語が学問的共通語であった時代を経て、英語やドイツ語がラテン語をみずからの内側に溶かしこんでいった過程は、そのまま日本の言葉に起こってもおかしくはない現象だといえる。もちろん、ラテン語と英語やドイツ語の言語構造・文法構造のへだた

りは、ヤマトの言葉と漢文のそれよりは、はるかに近接するものであるのはいうまでもない。むしろ実際には起こらなかった事柄、たとえばラテン語とトルコ語の融合、といったような例示をする方が妥当だろうが、いずれにせよ、そうした融合が江戸期よりも前に生じていれば、日本の言文一致はヨーロッパの近代言語と同程度にはスムーズかつ自然に達成されていたかもしれない。

しかし、そうはならなかった。その大きな要因は、徳川家康が林羅山に幕府の文教政策を統括させたことにある、というのが私見である。日本の統治機構の最上位に位置する幕府が、儒教をもって公認の学としたことにより、古代から連綿と続いてきた中国の文明を研究・学習する営為が「漢学」という体系へと発展した。そして、それにともなって、「漢文」も活き活きと復活する、いわばルネサンスがやってきたのである。と同時に、それまでの「漢文」の内実を問う動きも出てきた。そのもっとも先鋭なあらわれは、荻生徂徠が創始した古文辞学だろう。徂徠は、林羅山以来一種「国教化」した朱子学の古典解釈法を批判し、儒教の本来を理解するには秦漢期以前の文を直接原文で読むことに如かず、という当時としてはきわめて過激な主張をおこなった。これはそのまま漢文訓読法への攻撃であり、彼は和訓を廃して当時の口語中国語（「唐話」といった）を学び、それによって原文を読むことでしか、古代の經典の本義を得ることはできないと考えたのである。

荻生徂徠は、漢文訓読の大きな害のひとつとして、特に同訓異義の用字が多すぎることを挙げている。現在でも、たとえば「みた」というひらがなを、それこそ「みた」だけでは、それにあたる漢字が「見た」でよいのか、実のところはわからない。「見た」以外にも、「観た」「視た」「診た」「見た」という風に同音の漢字がいくつも出現する。これは、日本語の音韻の数が中国語のそれにくらべてはるかに少ないことに起因する現象なのだが、それらすべてを「みた」と訓じてしまうと、それぞれの語が含んでいるそれぞれの微妙な「異義」が吹き飛んでしまう、と荻生徂徠は批難するのである。

そして、彼はこうした同訓異義の語の相違を解説した辞書『譯文筌諦（やくぶんせんてい）』（一七一五）を刊行したのだが、その巻頭言「題言十則」の中で以下のようなことを（もちろん白文で）記している。

「此方學者。以方言讀書。號曰和訓。取諸訓詁之義。其實譯也而人不知其爲譯矣。」

内容は、「この国の学者は、地方語・和語で書を読み、それを和訓と称して字句の正確な古義を解釈したつもりでいる。実際にはそれは翻訳なのだが、当人たちはそれに気づいていない。」というほどの意味だろう。また、

「但此方自有此方言語。中華自有中華言語。體質本殊。由何脗合。是以和訓迴環之讀。雖若可通。實爲牽強。」

「和語はあくまで和語であり、中華の言葉は中華の言葉で、両者を吻合させることはできない。和訓で下からひっくり返して読んで、一見意味が通るように見えるかもしれないが、

その実牽強附会をおこなっているだけだ。」とも述べている<sup>17)</sup>。

漢文が外国の言葉であると考えるのであれば、書き下し文までも外国語の一部であるとするような分類はやめて、白文のみを「漢文」とすべきである、という現代ではごく当たり前に見える徂徠の主張は、しかし、当時の知識人にとってはやはり過激（この過激さゆえに、徂徠は仮想中国人たることをみずからに課しさえした）に過ぎたのだろう。結局、「漢文」というカテゴリーの再編は行われることはなかった。ただ彼の主張である「漢文」の切り離しが、大多数の知識階級にとって不可能だったということは、反対側から眺めると、日本の言葉がいかに分かちがたく「漢文」と融合してしまっているか、ということを示している。生物学では、異なった遺伝情報を担った細胞がひとつの個体内に併存していることを「キメラ」と呼ぶが、日本の言葉は古代から長らく遺伝的アイデンティティが単線化していない、というより、そもそも「すべてが同じ」であることを意味するアイデンティティという語の本義が成立していない状態を続けることで「成熟」してきたということが、徂徠の指摘によってかえってあらわになったといえるだろう。また、荻生徂徠が中心となった唐話学習ブームは、江戸期の文学に多大な影響を与え、中国の白話小説の翻訳（徂徠は翻訳不可能論者だったわけだが）が盛んになった。白話は、それこそ当時の中国における言文一致文体とっていいもので、『三国志演義』や『水滸伝』などは、その代表選手である。これら中国の作品の翻訳に影響され、上田秋成の『雨月物語』や曲亭馬琴の『南総里見八犬伝』といったすぐれた読本<sup>よみほん</sup>が出現したのだが、これらの作品群によって徂徠流の「漢文」ではない「漢文調」が流行したのは、皮肉な結果だった。こうして、上は朱子学や漢詩の隆盛により、また下からは読本などによって支えられて、「漢文」は日本における最上位言語として息を吹き返したのである。そして、この「キメラ」状況の強化は、そのまま「国語」への「呪い」となって、維新时期の洋学系指導層をこのうえなくいらだたせたのである。

#### 4. 森有礼の「国語英語化論」と馬場辰猪の反論

維新时期の指導層のなかで、「キメラの呪い」に翻弄された代表的人物とは誰かというところ、やはり、森有礼にまず指を屈するべきだろう。森は、すでに記した「明六社」の初代社長にして、のちの初代文部大臣でもある。彼の「日本の言葉」に対する態度は、前島密はもちろん、西周よりもさらに苛烈なものだった、という風に一般的には考えられている。なぜなら、森が提唱したのは、日本の国語として英語を採用したほうが良い、ということだったからだ。こうした「国語を外国語にすべき」論は、森有礼以外にも、たとえば日本が第二次世界大戦に敗北したあと志賀直哉が主張した「フランス語を国語に」論や、やはり敗戦後の昭和二十五年に「憲政の神様」尾崎行雄が唱えた「英語を国語にすべき」論が有名だが、志賀直哉の主張ははっきりと森有礼を先達と捉えているし、尾崎も森の論を意識していたにちがいない。

ない。つまり、森有礼の主張こそが、「国語を外国語にすべき」論の嚆矢なのだと考えていいということになる。

「日本語廃止・英語採用論」と後年称される彼の論に対しては、それが英文著作“Education in Japan”（『日本の教育』）の「序文」の形で発表された直後の時点で、馬場辰猪によって反論がなされているし、そのほかにも同時代の反対論は多く存在した。後代の学者からも、時に「売国的思想」といった罵倒に近いような批判を多く受けている。しかし、馬場辰猪は別にして、後代の罵倒的批判が必ずしも正当ではないのではないか、という見解をイ・ヨンスクは提出している。すでに、「はじめに」の項でイの、「近代日本の国語意識のありかたをあきらかに」するには、『国語』概念の成立過程が『日本語』の同一性そのものの確認の作業と平行していた」ことを見落としてはならない、という主張を紹介した。森有礼の論もまた、「日本語の同一性」を見出そうとする困難、使用言語の統一性・将来像が見えない苛立ち、そして押し寄せる欧化の波に対応せねばならない義務感とにはさまれながらひねりだされた思考であり、「国語」の像が明確化してきた後代から、売国的思想として糾弾されるのは、やや不当なのではないかというのが、イ・ヨンスクの立場である<sup>18)</sup>。

果たしてその論が正当であるかどうか検討する前に、森の英文著作“Education in Japan”成立までの彼の閲歴について、ざっと眺めておく方が彼の立ち位置の理解に役立つと思われるので、以下簡略に述べておきたい。

森有礼は、一八四七年（弘化四年）に薩摩藩士の五男として鹿児島で生まれている。十二歳頃から漢学を藩校で学び始めるが、四年ほどで洋学に転じた。そして、薩英戦争後の一八六五年、十七歳の時、薩摩藩の留学生としてイギリスのロンドンに渡る。もちろん、徳川幕府の法令下では海外渡航は、まだ禁止されている状況である。かの地ではロンドン大学で歴史、物理、化学、数学などといった学問を学んだというが、ヨーロッパ文明の息吹にどれほどの衝撃を受けたか、現代の私たちの頭ではちょっと想像できないほど深刻なものがあったのではないか。

その後はアメリカに渡り、キリスト教に接近し、しばらく勤労と信仰の生活を送っていたらしい。アメリカの教育に興味を持って、教科書などを集めていたのもこの時期のようである。が、王政復古の知らせを受けて、一八六八年に帰国。しかし、七〇年の末には弁務士、すなわち外交官として再度渡米。七二年には駐米弁理公使に就任した。年齢は、わずか二十五歳である。“Education in Japan”を出版するのが、その翌年の七三年。同じ年の七月には、日本に戻って「明六社」を結成した。

さて、問題の“Education in Japan”（『日本の教育』）の内容だが、これは森が駐米弁理公使の立場で、アメリカの著名な知識人十五人に日本における教育のありかたについての質問状を出し、その回答を編集し、さらに森有礼自身が日本の歴史と日本の言葉の特色について概説し、その文章を合わせてニューヨークで出版したものなのである。その十五人のひと

りに、イエール大学の言語学者W・D・ホイットニーがいた。そのホイットニー宛ての質問状に、いわゆる「日本語廃止論・英語採用論」の最初の形が展開されていた（そして、それが『日本の教育』の「序文」へと発展した）のである。この質問状について、のちに国語学者の時枝誠記が「明治の初年に、森有礼が、日本語廃止、英語採用論を唱へ、アメリカの言語学者ホイットニーにたしなめられたことは、有名な話であるが」と記した例などが、のちの数ある批判・揶揄の典型だが、では、実態はどうだったのか。本当に、森有礼の論は、はなはだしい暴論だったのだろうか。

「国語英語化論」として糾弾された森有礼の“Education in Japan”の序文は、すでに述べたように、日本語と日本の歴史をアメリカ人に対して説明するという内容だった。その英語原文は、『新修森有礼全集』（文泉堂書店刊）の第五巻に収録されている。以下、その終わりに近い部分の引用である。

An allusion to the subject of the Japanese language bears a most direct relation to the contents of this book. In the style of expression, the spoken language of Japan differs considerably from the written, though in their structure they are both mainly the same. In the written language there are fourteen elementary sounds, including five vowels. (中略)

The vowel sounds are each defined and all short. The style of the written language is like the Chinese. In all our institutions of learning the Chinese classics have been used. There are four different methods of writing a character, and all of them are of Chinese origin. These methods differ in the degree of their complexity, and are graded according to their simplification of the Chinese character. The words in common use are very few in number, and most of them are of Chinese origin. There are some efforts being made to do away with the use of Chinese characters by reducing them to simple phonetics, but the words familiar through the organ of the eye are so many, that to change them into those of the ear would cause too great an inconvenience, and be quite impracticable. Without the aid of the Chinese, our language has never been taught or used for any purpose of communication. This shows its poverty. The march of modern civilization in Japan has already reached the heart of the nation – the English language following it suppresses the use of both Japanese and Chinese. The commercial power of the English speaking race which now rules the world drives our people into some knowledge of their commercial ways and habits. The absolute necessity of mastering the English language is thus forced upon us. It is a requisite of the maintenance of our independence in the community of

nations. Under the circumstances, our meagre language, which can never be of any use outside of our islands, is doomed to yield to the domination of the English tongue, especially when the power of steam and electricity shall have pervaded the land. Our intelligent race, eager in the pursuit of knowledge, cannot depend upon a weak and uncertain medium of communication in its endeavor to grasp the principal truths from the precious treasury of Western science and art and religion. The laws of state can never be preserved in the language of Japan. All reasons suggest its disuse.<sup>19)</sup>

まず森は、日本語の話し言葉と書き言葉（ここでの「書き言葉」は、「漢字仮名交じり文」を意味している）の乖離について解説する。両者は、文法の面ではほぼ同じ構造を持っているにもかかわらず、その書記形式においては著しい違いがある。日本の書き言葉の文体は中国語同然であり、これまで教育に使用されてきたのも中国の古典である。そして、ひとつの漢字に対して四通りの書き方がある（おそらく、森は漢字の書体四種、すなわち「隸書」「楷書」「行書」「草書」のことを言っているのだろう）のだが、それらはすべて中国語＝漢字由来で、漢字の書き方をどのように簡略化するかによって複雑さの程度が異なっている。この漢字由来の書記言語の助けなくしては、われわれの言語はけっして教えられてこなかったし、いかなるコミュニケーションも成立させられなかった。単純な音声文字に換えようという努力もあったが、視覚でなじんでいる語が多く、それを単純に聴覚に合わせるのは実用的ではない（この箇所は、同音異義語の問題の指摘である）。これらはすべて、日本の言葉の貧しさのあかしである、というのが自国言語に対する森の定義である。

一方、近代文明は日本の内奥まで達してきて、その歩みにつきしたがう英語は、日本語と中国語の使用を抑えこみつつある、とも森は言う。英語を使う種族の商業的支配力は世界をおおいつつあり、日本の民はそうした商習慣を学ばねばならなくなっている。すなわち、英語の習得をすることが自分たちには課されているのであり、それなしで世界の国々に伍して独立を維持することはできない。つまり、日本列島の外ではけっして用いられることはない自分たちの貧しい言葉は、英語の支配に服すべく運命づけられているのだ。知識の追求に熱心な知的種族である日本の民が、西洋の学問その他から真理を獲得するには、脆弱かつ不確実なコミュニケーション媒体に頼ることはできない。国家の法律も、日本の言語によって保持することはできない。これらすべての理由が、日本の言語の廃棄を示唆している、というのが森の主張である。

既視感、という歴史的な時間順序が転倒するので、あるいは不適當かもしれないが、しかし、よく似た論旨はごく最近も見かけている気がする。いうまでもなく、二十世紀の終わり頃から一際かまびすしくなった例の「グローバリズム」をめぐる言説に、森の論はひどく似通っている。「日本語」＝「国語」が確立したはずの現在でも、なお「日本語廃棄」的言

説が盛んになるという事実には、私たちの言語が担う「呪い」が相変わらず強く働いていることをうかがわせるのだが、とりあえずは脱線せずに森有礼の思考＝志向をさらにたどることにしよう。

後代の学者や識者が森有礼に浴びせた批判には不当なところがある、という論を立てているイ・ヨンスクは、この序文で見逃してはならない箇所があると述べる。それは、森が単に「日本語 (Japanese)」とは言わずに、「日本の言語 (the language of Japan)」と書いている点だ、というのである。たしかに、森は中国語＝漢文については“Chinese”と記しているのに、自国の言葉についてはイの指摘にある“the language of Japan”もしくは“Japanese language”と書いている。この用語について、イは「森有礼は、『日本の言語』は Japanese と Chinese の無秩序な混合状態からなっていると固く信じていた」から、こう書くよりほかなかった、と記す<sup>20)</sup>。また、「英語は、日本語と中国語の使用を抑えこみつつある」と森が記す際に使った“Japanese”と“Chinese”の両方の単語に関しては、「Japanese とは、漢語要素や漢文文体を排除した『やまとことば』を指し、Chinese とは、日本で用いられる漢字、漢語、漢文を指すと考えた方がよい」とも述べている<sup>21)</sup>。

つまり、現在私たちが「日本語」の書き言葉として、ごく当たり前に漢字仮名交じり文を想起するのは異なり、森有礼はそれを「やまとことば」と「漢語要素」の「無秩序な混合状態」としてしか見ることができなかった、ということになる。したがって、彼が「国語」に「英語」を採用しようとした動機は、その「混合状態」からの脱却願望だったと考えられるのだ。当時の英語は、話し言葉と書き言葉の乖離が比較的少なく、しかも、大英帝国とアメリカの政治的経済的ポジションが巨大化していく過程にあったから、「商業民族」である日本の民（森有礼は、日本人をそう定義づけていた）にとって「英語」の採用は自主独立を保持しつつ発展するために必須の選択だと、森は考えたのである。欧米の帝国主義的膨張に危機感を抱いている後進国の指導的インテリとしては、こうした考え方になるというのも理解できないことではない。とりわけ、自分たちが長らく先進国として仰いできた中国に対するイギリスの侵略的「外交」に震撼させられた立場としては、その中国の言葉によって形成されてきた自国言語を廃棄したいと切望する、という態度をとるのも心情的にはわからなくもない。だが、とはいえ、“Education in Japan”のこの序文のみを眺めれば、やはり世界の情勢の急にうろたえたあまりの暴論、という風に後代受け取られても仕方がないだろう。いや、後代どころか、この森有礼の著作が出版された直後に、すでに述べたように馬場辰猪が日本語の文法書を英文で書くという方法によって、森に反論を行っている。

馬場辰猪は、土佐藩出身でのちに自由民権運動の思想家・活動家として活躍し、渡米後三十八歳の若さで客死した人物である。彼は、森と同様、藩の留学生としてイギリスに留学した「二重言語者」だ。その最初の留学中（一八七〇～七四）に“Education in Japan”を読み、森の「国語英語化論」を批判するべく“An Elementary Grammar of the Japanese

Language” = 『日本語文典』を世に問うたのである。表題の英文が“The”ではなく“An”ではじまっているところに、馬場のいくぶん控え目な感情が読みとれる観はあるが、その序文には彼の日本語への誇りがはっきりと読みとれる。以下、英文全文を引くのは煩わしいので、かいつまんで紹介する。馬場は、まず『日本語文典』執筆の目的をふたつ挙げる。ひとつは、日本の話し言葉についての全般的概念を伝えること。ふたつめは、日本の言語がはなはだしく不完全で、体系的教育に不向きであるという見解に異議を唱え、その理由を示すこと、であると彼は述べる。そして、日本語を廃して英語を採用すべきであるとか、日本の言語は貧しいもののだといった意見を口にする人々が、日本の言葉をじゅうぶん吟味したうえでそう発言しているとは思えないと主張する。

We have two objects in publishing this book—the first, to give a general idea of the Japanese language as it is spoken ; and the second , to protest against a prevalent opinion entertained by many of our countrymen, as well as foreigners who take some interest in our country, and to show the reasons why we do so. It is affirmed that our language is so imperfect that we cannot establish a regular and systematical course of education by means of it; and that the best way is to exterminate the Japanese language altogether, and to substitute the English language for it. Those who maintain this opinion ought to have examined the language and proved its imperfection as a medium of intellectual thought and expression, but so far as we are aware they have not done so.<sup>22)</sup>

この段落に続いて、馬場は森有礼の“Education in Japan”の序文を例に挙げ、その論を批判している。またさらに、馬場は「漢字」に関わる指摘もおこなっている。曰く、「漢文」を受け入れる際に、日本の言葉では表現不可能な漢字や漢文の語句を使わざるを得なかったのは、他国から古典文学を輸入する場合、ごく普通に起こることでもめずらしくはない。なぜなら、「漢文」には日本の言葉の範囲内に同義語や相当する語句を見出せない言葉が、数多く存在したからだ、と。そして、ジョン・ロックの『悟性論』から、異言語同士で概念範囲を共有することがいかにむずかしいかを説いた一節を引いた上で、「ある言語が他の言語の助けをかりて」成立しているというのは、「その言語の貧しさを示すものではなく」、「ただ、考え方や習慣の相違を示している」に過ぎないのだ、と論じている<sup>23)</sup>。

異なる文化圏から言語が流入し、新来の知識＝単語が導入され、それが翻訳されることなくやがて在来の言葉に同化していくというのは、馬場が指摘するようにごく当たり前の現象である。ただ、森有礼が日本語の「貧しさ」を語った時想起していたのは、その「翻訳されなさ」の度合いの、はなはだしい極端さだったといえるだろう。したがって、森と馬場の論

点は、そのあたりですすでに微妙にすれ違っている。しかも、『日本語文典』の序文で注目すべきは、日本の言葉として馬場辰猪が念頭に置いていたのが、日本の話し言葉だったという点だろう。彼自身、序文の最初にはっきり、目的の第一は“the Japanese language as it is spoken”についての全般的概念を提示すること、と記しているし、『日本語文典』本文である文法解説と例文も口語のみを扱っている。

本題からいくぶん逸れることだがちょっと触れておくと、わずか二十三歳だった馬場が編んだ教科書を眺めるといろいろ興味深いところが多い。こまかい点をいちいち取りあげると脇道に入りすぎるのでやめておくと、個人的に驚いたのは明治六年時点での日本の口語が、現代のそれとほとんど変わらないということだった。もちろん古風ではあるが、たとえば時制を解説する部分で挙げられている例文のひとつを示すと、「見る」の現在形・過去形・未来形は、それぞれ「わたくしは見ます」「わたくしは見ました」「わたくしは見ましょう」となっている。最後の「見ましょう」は、現在では「見るでしょう」となるだろうが、全体として現代の日本語とほぼ同じである。可能態も、「わたくしは見ることができます」「わたくしは見ることができました」「わたくしは見ることができますよ」という具合になっている<sup>24)</sup>。土佐の出身であった馬場辰猪にとって、例示されている口語がどのような位置を占めていたのか、言い換えればこの口語はどこかの口語であったのかを探ると、いっそう面白い局面があらわれるように思われる。おそらくは、十六歳から二十歳までの間在籍していた江戸の福沢諭吉の塾（言うまでもなく、のちの慶応義塾）で使われていた口語だろうと推測できるが、とすれば、すでに明治維新をむかえる以前に、江戸で通用していた口語は、現在私たちが使っているそれと大差ない形をなしていた可能性が高いことになる。また、それがそれぞれ地方語を「母語」とする人々にとっての共通語的存在だったと仮定するなら、のちの言文一致問題を考える上で、その口語の出自や来歴を充分検討しなければならないといえるだろう。

ともあれ、馬場にとっては日本の言葉は、森有礼が嘆くような「無秩序な混合状態」ではなく、すっきりとした論理性を備え、法律の条文にも耐えうる言語として認識されていたのである。この信念は、ひとつには馬場辰猪の受けた教育にも関連しているかもしれない。彼は英学には堪能だったが、旧来の基準学問だった漢学の素養には欠けるところがあったらしいのである。日本初の近代政党である自由党（板垣退助が党首で、馬場辰猪もその議員のひとりだった）のシンパであった新聞人・大井通明の編になる『日本全国新聞記者評判記』（明治十五年刊）は、明治初期の著名な言論人・政治家四十一人の評を集めたものだが、馬場も俎上に挙げられている。「文章」「議論」「弁舌」「学芸」「性質」「品行」「実務」といった項目を連ねたその評判記で、彼の「文章」は「大二其法ニ暗クシテ書翰（しょかん）モ能ク認ムルヲ得スト云フノ評判」であり、「学芸」は洋学に達しヨーロッパ古今の事情にはくわしいが「惜ヒ哉漢學ニ於テハ實ニ暗シトイフ」と書かれている。ここでいう「文章」とは、漢

文もしくは漢文訓読体（明治普通文）の候文そうろうぶんをさしているとおぼしい<sup>25)</sup>。この評判記のみをもって判断するのはやや不当かもしれないが、しかし、馬場辰猪が当時の水準から見て、漢文訓読体を使いこなすことができなかつたことは、ほぼ間違いがないだろう。『馬場辰猪全集』に収められた演説の筆記原稿は漢文訓読調になっているが、これは筆記者が講演を漢文調に直した可能性が高い。つまり、彼にとっての日本語はストレートに日本の口語だった（「評判記」でも、彼の雄弁については最大限の賛辞が与えられている）のであり、その点で日本の言葉が錯綜しているという森有礼の感覚には共感しえなかつたのではないだろうか。森は英語に堪能なばかりでなく、漢学の素養も深かつた。

結局、馬場辰猪の日本語への信頼感は、日本語に対する彼のイメージがすっきりした単線を描いていたことによるのであり、さらにつけくわえるなら言文一致が成立する過程の起点部に馬場は立っていたと考えることができる。そしてまた、その日本口語への信頼感ゆえに森有礼の「国語英語化論」を一蹴することが可能だったのである。馬場は、日本語とはまったく異質の、しかも決して習得が容易ではない英語を国語にすることによって、階層化が著しく進んでしまうこと、つまり英語をあやつれる上層とそうでない下層に国民が分断されてしまう事態が生じるだろう、と指摘する。また、そもそも他国語を取り入れるのは、自国が征服されやむを得ず、というのが歴史の大勢であって、自ら進んで取り入れることはなく、そうした場合でも被征服民は母語を決して捨てることはない<sup>26)</sup>。そして、森有礼をたしなめたとされるW・D・ホイットニーの森宛の書簡（森の“Education in Japan”に収められているもの）にある「一般大衆を教化するのであれば、それは彼らの母口語（native speech）を通じてなされるべき」という言葉を最後に引用し、自分たちがすでに手にしているものを豊かで完全なものにするよう努力する方が、それを捨て去ってまったく異質なものを採用するという大きな危険をおかすことよりはるかに望ましい、と『日本語文典』序文を締めくくるのである<sup>27)</sup>。

現在の観点から言って、馬場辰猪の論はまっとうすぎるほどまっとうである。そして、日本語をめぐる歴史の流れも、日本語を廃棄するというようなことにはならず、森有礼の主張は馬鹿げた気の迷いといった扱いを受けてきた。しかし、『日本の教育』序文で一見そう感じられるほどには、森有礼は英語という言語を手放しで尊崇していたわけではない。『日本の教育』が出版される以前のホイットニーとの手紙のやりとりでは、森有礼はむしろ英語を攻撃していた、とイ・ヨンスクは指摘する。森は、「英語からすべての不規則性を取り除いた「簡易英語」を日本に導入することをホイットニーに提案している<sup>28)</sup>。これは、二十世紀に入ってイギリスの言語学者チャールズ・オグデンが提唱した「ベーシック・イングリッシュ」の考え方の先駆といっている。また、エスペラント語の概念とも通じるものがあり、あるいはリングワ・フランカ、つまり世界共通語（かつてのラテン語、現代の米語がそれにあたるだろう）のピジン語化といった側面とも響きあう事柄であるだろう。森有礼にはそれ

までの日本の歴史においてリングワ・フランカであった漢文（東アジア圏では、筆談で通商が可能だった）を捨て、新たなリングワ・フランカとなる公算が大きい英語に、日本の言葉そのものをすべて投げ入れることによって単線化したいという欲望がありすぎたがゆえに、暴論を吐かざるを得ない運命にみずからを、それこそ投げ入れてしまったのではないか。

ここでいう「単線化」とは、別の言い方をするなら「キメラ」としての日本語からの脱却ということになるだろうか。この「キメラ」であるという日本語の「呪い」は、実は、馬場が指摘した「自ら進んで異言語を身内に取り込むような言語はない」という見解に対する反証そのものとして日本語の歴史が成立しているという点にあり、その事実が森を苦しめたということになるのである。しかも、この「呪い」は、森の苦悩とは裏腹に「国語」の成立に大きな役割を果たしたとも考えられるのである。

## 5. 「漢語」由来の翻訳語と「国語」

馬場辰猪が指摘したように、人類における言語の歴史をふりかえってみても、ひとつの社会で複数の言語が使分けられ、しかも公的な上級言語と日常的・土着的な言語という色分けがなされるのは、国（社会）が征服されたり、植民地化された場合がほとんどである。ローマ帝国がヨーロッパの大半を征服・占領した結果、公用語としてのラテン語と現地語の併存が起り、やがて現地語にもラテン語の影響が深く浸透していき、ヨーロッパ諸国それぞれの「国語」ができあがった過程について、ヨーロッパの歴史をある程度学んだ馬場は、おそらく知識を持っていただろう。前記の指摘は、そうした知識にもとづいているわけである。こうした征服・被征服によるダイグロシア（二重言語）状況は、もちろんヨーロッパだけの現象ではなく、古代中国の周辺諸国家においても同様だった。前漢の武帝の時代に既に征服されたベトナムはもちろん、中国の戦国時代からたびたび中国の王朝の支配下・影響下におかれた朝鮮半島においても、土着語の上部構造として漢文・漢字を使用することは、自らの選択によるものとは言いがたかった。しかし、わが邦の独自性は、その二重言語状態を自ら選んで受け入れた点にあると言えるだろう。

もちろん、たとえば、七世紀半ば、天智帝が滅亡した百済救済のための軍勢を半島に送り、しかし、唐・新羅連合軍に大敗を喫した白村江の戦いを考えた場合、戦後勢いに乗じた唐が日本を攻める可能性はあったわけで、その急迫的事態によって唐朝の制度に準じた国家体制の整備が促進され、言語状況もまた、それとともに漢文・漢字への傾きを大きくしたということは言える。が、それをもって征服・被征服の関係性が生じたとは到底言いがたく、やはり先進文明の果実をわが物にしたい欲求によって、漢文・漢字に固執したと考える方が当たっているだろう。即物的な言い方をするなら、中国に対して絶妙な地理的位置にあった島国・日本の幸運があるのかもしれない。同じ島国ではあっても、グレートブリテン島のよう

に、北部（現在のスコットランド）をのぞいてローマ帝国の植民地になった古代のイギリスとは、大きく運命が異なっている。そして、それはまた、英語と日本語の歴史の違いともなっているわけである。そうした偶然の運命を背景に、日本は漢文を訓読という翻訳方法でヤマト言葉の中に溶かしこんでいき、また、漢字を仮名に変換していく道を取った。ということは、日本の言葉はこの段階から、実は「翻訳」を中核において育っていったということを意味する。極端な表現をするなら、日本の文章語は翻訳語そのものだったともいえるのではないか。と同時に、これもすでに述べたことだが、漢文訓読という方式には大きな「欠点」があった。荻生徂徠が指摘したように、同訓異義の語があまりに多すぎるのである。複雑で多彩な音韻体系を反映した漢字を、比較的単純なやまとの音韻体系で訓じてしまえば、その微細なニュアンスは失われてしまう。

もっとも、日本語が漢字に当てた音訓の問題には、さまざまな点で複雑かつ未解明な部分が多々ある。五、六世紀以降の漢字の原音に添ったものが「呉音」「漢音」「唐音」（鎌倉期の移入音）といった「音」であり、漢字の意味をヤマトの言葉に照応させて日本土着の音<sup>おと</sup>を当てたのが「訓」である、というのが一般的な考えだ。しかし、すでに遠く弥生時代にたくさんの漢字音が日本に流入していて、「訓」には実はその古い漢字音が反映されたものがある、日本語はそもそもアルタイ系言語と中国語の語彙が混ざってできたクレオール語である、という小林昭美のような論者もいる<sup>29)</sup>。その考え方にのっとりながら、クレオール語として出発した日本の言葉（大野晋も、クレオールタミル語が日本語の祖先だとしていた）にそもそも純粹独自の音は存在しなかった、という見方もできなくはない。

が、とりあえず、考証がきわめて困難なその種の言語考古学的議論を迂回して述べるなら、漢文訓読によって本来漢文が保持していた多様な起伏が、のっぺりした抽象性へとならされてしまったことは否めないだろう。仏典由来の言葉などが典型例だが、漢語は日本では抽象概念を表現する場合が圧倒的に多く、学問的な事柄や歴史叙述、道元の『正法眼蔵』（漢字仮名交じり文で書かれている）のような一種の思想書にとって欠かせない道具となったが、微細な手触りを欠くがゆえに、読む者にどこかよそ事めいた遠さを感じさせる言葉ともなった。そして、ひっかかりがない分、その言葉をめぐる解釈の多義性をも生んだわけで、同様の現象は古典ギリシア語やラテン語を受け入れたヨーロッパ諸語にも起こったが、音素文字であるアルファベットのおかげで、日本での事例よりはそのよそよそしさが減じられた観がある。結局、「漢語」を訓読で「翻訳」し、その語が本来言いあらわしているはずの語義そのものを、きちんとヤマト言葉の範疇にまでひっぱってきて解釈することをせず、なんとなく曖昧にわかった気持ちになることが要請され、場合によっては「漢語」由来であることによって「翻訳」された単語に権威付けがなされてしまったのである。これこそ、幕末期から明治初頭にかけて漢字廃止を唱えた前島密や、英語国語化論を主張した森有礼が、日本の言葉の貧しさとして捉えた「日本語」の未成熟という問題に直結している。概念や思想を漢語

に預けたまま千年を超える歳月を経てしまった自国言語によっては、欧米の思想や学術的成果、法や経済の社会システム、科学技術を表現できないという事実が、彼らに暗澹たる思いを抱かせたのだ。キメラの呪いとは、まさしくその点にあったわけである。

だが、明治初期の、それこそ陳腐な言い回しだが、怒濤のごとき新知識の流入は、むしろその呪いを温存し、拡大する方向にむけて状況を押し流していった。欧米語を「翻訳」するために開発された膨大な漢語群こそが、その果実だった。しかも、そうした語を発見・発明したのが、日本語ローマ字化論を唱えた西周に代表される欧化主義者・漢字廃止論者たちだったという皮肉な巡り合わせについては、すでに触れた通りである。馬場辰猪のような例外はあったが、江戸期の漢学によってその基礎教養を磨き、そののちに洋学の洗礼をうけた者が過半を占める彼らが、洋学の思想をしかたなく漢語で言いあらわしてしまう傾向があっても不思議ではなかった。しかも、それを補強するかのように、明治維新は漢字に関して奇妙な現象を生じさせた。その現象とは、明治以前であれば漢字・漢文の教養からは遠かったであろう階層まで含め、風俗上の大流行と言っているレベルで、多数の人々が一斉に漢語を使うようになったことだ。当時の風潮を描いた仮名垣魯文の『安愚落網』や、やや時代が下って発表された坪内逍遙の『当世書生気質』に登場する書生たちの交わす会話を見れば、カタカナの西洋語と並んで漢語がおびただしく使われているのがわかる。書生といえば、いわば知識階級のとば口に立っている青年であるから、漢語を多用するのは自然であるとも考えられるが、これが芸妓となるとその現象の特異さがいっそう際立つだろう。

『幕末明治新聞全集』第五巻にある、「慶応第四年戊辰夏五月『都鄙新聞』第一」には、次のような記事が載っている。

「此頃鴨東ノ芸妓少女ニ至ル迄、専ラ漢語ヲ使フコトヲ好ミ、霖雨ニ盆池ノ金魚ガ脱走シ、火鉢ガ因循シテキルナド、何ノワキマヘモナク、言ヒ合フコト、ナレリ。又ハ客ニ逢フテ、此間ノ金策ノ事件ニ付建白ノ御返答ナキハ如何ガ、ナド実ニ聞ニ堪ヘザルコト也（後略）」<sup>30)</sup>

慶応四年の五月といえば、あと三ヶ月ほどで明治元年になる時期である。その当時の京都・祇園あたり（鴨東は、鴨川の東岸を指している）の芸妓が、おそらくは勤王の志士たち（敵対する新選組などでもあるかもしれない）が使っている用語にかぶれて、金魚が雨であふれた池から逃げだしたことを、ことさら大仰に表現しているありさまを、新聞は呆れ混じりに記事にしているのである。明治・大正・昭和を通じて在野の文化史研究者として活躍した石井研堂も、その著作で、同じ記事について触れている。

「明治維新後、日常の会話に、漢語を使ふことの大流行を見しは、奇なる現象なり。思ふに、これは維新の風雲に際会してにはかに擡頭せる官吏は、多く月落ち鳥啼いて的書生畑より出でし人々であり、その人々の使用語が、優越語標準と認められ、それを真似るのが天下一般の維新色を發揮せしにあらざるか。明治維新と同時に、神道を唯一の

尊奉すべき標的とせるにかかはらず、使用語のみが、際立ちて漢語の多くなりしは、かかる因果なるべし。』<sup>31)</sup>

という風に書いたあと、「都鄙新聞」の記事に触れているのである。ただし、さらにそのあとに、こうした漢語の流行が、少なくとも明治維新前後においては、単に流行の域を出ないものだったことにも言及して、政府から布告される漢語満載の法令をちゃんと理解する者は、十人にひとりかふたりであった実情を紹介している。とはいえ、最初は意味もよくわからずに、流行だからというので漢語をふりまわしていた層にも、すぐに理解の欲求が生まれてくる。すると、そうした求めに応じる出版物も出てくる道理で、早くも明治三年に刊行された『童蒙必読 漢語図解』は、その種の書物の代表例だろう。この小冊子は、婦女子に漢語を理解させるという名目のもと、三百近い語を集めてひとつひとつの意味を説明し、さらに絵まで付してあるのだ。収録された語とその意味解説は戯作風味もあってなかなか面白いが、ここではくわしく触れることは控える。

この状況は、いわば自然発生的に非エリート層までもが、明治以前には縁遠かった漢語に馴染みはじめたことを意味する。たとえ、それがエリート層が駆使する漢文的教養の猿真似であったとしても、一種の知的沸騰であることはまちがいない。そして、欧化・開明主義を掲げ、漢文の呪縛から日本の知を解放しようとしている明六社系の知識人たちの大きな目標はといえば、民衆へ欧米の知をすみやかに教えることであった。つまり彼らは、知的に不経済である（と考えた）漢語・漢字を廃したい欲望と、同時に民衆を教化する道具としては、欧米語の漢語への「翻訳」が有効であり得るという事実との間で板ばさみになったのである。エリートである彼らは、漢学の教養を持ちながら欧米の言語に熟達した二重言語者だった。だが、すべての民衆に外国語の素養を要求することが不可能であることは自明であり、しかも、国家として欧米の圧力に抗するには、国民全体の知的水準をあげることが必須であるのもまた、自明だった。その結果、今も私たちの「国語」の中に欠くべからざる必須要素として存在する、「文化」「文明」「思想」「意識」「時間」「空間」「社会」などなど幾多の和製漢語が、「翻訳語」として産みだされたのである。こうした事態はまた、「キメラの呪い」を新しい次元で再構築することにもつながった。なぜなら、漢語は日本語の歴史の中では、抽象的概念を担当することによって常に外様のなよそよそしさを担っていたからで、外様である漢語に、より一層外様である欧米語を託したのだから、そのよそよそしさの度合いは数層倍になる。漢語によって「翻訳」された欧米語は、茫々漠々たる曖昧模糊（これもまた漢語の塊）の広がりとして、日本人の眼前に次々にあらわれ、やがて使用者それぞれのあまたの解釈と使用法が交錯する中、「国語」の重要な要素として定着していったのである。

いうまでもなく、明治以前にも外国語を漢語によって翻訳する試みは為されてきた。一七七四年に世に出た『解体新書』では、すでに日本語として存在していた「鼻」とか「頭」といった語以外に、からだの内部器官をあらわす「軟骨」とか「動脈」、「神経」といった造

語が生みだされた。それまで日本では認知されていなかった臓器・部位なのだから、新語が必要になるのは当然だろう。十九世紀に入って、宇田川榕庵が近代化学をはじめて日本に紹介した『舎密開宗（せいみかいそう）』（「せいみ」はオランダ語の「化学」の音訳）をはじめ、多くの自然科学書を翻訳した時に作った言葉は、今日私たちにも馴染み深い「酸素」「水素」「炭素」「分析」「細胞」といったものであり、そのほかにも、幕末期の蘭学者の聖典であった辞書『ドゥーフ・ハルマ』は、「natuur」の語に「自然」という訳を与えているなど、江戸期の洋学者たちの努力で生みだされた「翻訳語」はたくさんある。ただ、明治期に入って生まれた翻訳漢語にくらべ、江戸期のそれは具体的な物質を指し示す語が多かった。したがって、訳語がそれ自体として意味がよくわからない漢字の組み合わせだったとしても、実物との照応関係がはっきりしているためにかっちりした符号としての役割を果たした。それは、肉眼では見えない「酸素」「水素」といった物質であっても変わりはない。しかし、新しい社会システムを指し示したり、抽象的で捉えにくい概念を欧米語から漢語に移しかえると、わかりにくさは何倍にもなる。また、そのわかりにくさが、単語そのものに一種荘厳な神秘性を与えたりもする。明治以降の「翻訳語」には、そうした運命がつきまとうことになったのである。そして、これらの言葉が組み込まれつつ成長した近代の「国語」もまた、曖昧模糊と苦闘しながら形成されるほかなかったのである。

## 6. おわりに

自国言語に「純粋性」を付与し、それを使用して広く民衆の教化を行いたい、そのためには「漢文」と「漢語」を廃絶すべきであるという、維新期の知的指導者たちの思いは、限られた知識や想像力に依拠するしかない人間の企図で左右するにはあまりに大きな容量とエネルギーを持つ言語の前に、いったんは屈するほかなかった。「国語」を「英語」にしてはどうか、という森有礼の極論も、広い支持を集めることはなかったし、森自身、文教政策の要職に就任する頃には、その所論を口にするとはなくなった。しかし、彼らが唱えた「漢字」からの脱却は、その後も「国語」問題の大きな潮流として、現在に至るまで残存している。かつ、維新时期以降、「国語」は紆余曲折を経て漢文的要素を少しずつ洗い落としながら、成熟していった。漢文訓読由来の「普通文」、いわゆる文語体も、作家を中心とする「言文一致体」の開発によって徐々に「口語文体」へと変わっていった。夏目漱石の小説デビュー作『吾輩は猫である』や、それに続く『坊ちゃん』は、そうした作家たちの営為がもたらした里程標であるだろう。さらには、明治後半から文教政策における「国語」分野に大きな影響力を持った上田萬年や保科孝一といった国語学者の活動にも目を向けねばならない。「国語」における「現代文」＝「言文一致の口語体」の重視、そして「古文」「漢文」を別項目として扱う現代にも続く方式は、こうした国語学者たちによって整備されたといっている。しか

し、これらについて論ずるのは本小論の容量を超えることであるので、指摘のみにとどめる。

最後に、現代の日本語における英語の影響について感想めいたことを記しておく。高度成長期以降、「現代国語」から漢文文脈がほぼ消え去り、「現代国語」＝「日本語」という認識が定着した。そして、近年ではその日本語にカタカナ語で表記した英語を混入させて文を構成する方式が一般化している。これは、かつての漢文訓読的な漢語の混用と一見類似している。この現象を、一種の「翻訳語」として歴史を刻んできた日本語の特性が、外来語として英語を受け入れているだけで、その頻度が「グローバル化」の波によってはなはだしくなったただけだ、という見解は当然ありうるだろう。しかし、私見では、かつての「漢語」の創造と使用にはなにかしかの「解釈」が付随したが、現今の英語の混用にはその種のひと手間がなく、直接的に日本語に接続していると思える。それを、単なる外来語の多用ではなく、日本語の英語ピジン語化と見るべきなのか、筆者にはまだ判断がつかない。しかし、さまざまな分野（音楽の歌詞などに、はなはだ顕著だが）で、日本語に英語という異言語がそのまま接続されて使用される局面が増加している。これが、日本語に宿命づけられた「呪い」の新たな展開であるのか、または、それとは異なる未知の次元の出来事であるのか、いっそう注意深く観察していくこととしたい。

(文中敬称略)

本稿は、東京経済大学 2011 年度国内研究における成果の一部である。

註

- 1) イ・ヨンスク『「国語」という思想 近代日本の言語認識』岩波現代文庫 2012 vi
- 2) 同書 vii
- 3) 同書 viii
- 4) 同書 viii～ix
- 5) 西尾実・久松潜一 監修『国語国字教育史料総覧』国語教育研究会 1969 pp.17-20 所収
- 6) 同書 p.17
- 7) 同書 p.18
- 8) 同書 p.17
- 9) 同書 p.18
- 10) 「明六雑誌」第一號 西周「洋字ヲ以テ國語ヲ書スルノ論」国立国語研究所蔵書データベース(写真) 画像1オ～10オ
- 11) 同書 画像4ウ～5ウ
- 12) 同書 画像7ウ
- 13) 福澤諭吉『西洋事情』慶應義塾大学出版会 2009 p.80
- 14) 高島俊男『ことばと文字と文章と』2011
- 15) 同書「ことばと文字と文章と」p.114

明治維新时期「国語」創成への歩み

- 16) 同書「ことばと文字と文章と」 p.56
- 17) 荻生徂徠『譯文筌蹄』小泉秀之助 校訂 須原屋書店 1908「題言十則」 pp2-3
- 18) イ・ヨンスク『「国語」という思想 近代日本の言語認識』岩波現代文庫 2012 序章
- 19) 大久保利謙 監修『新修 森有禮全集』文泉堂書店 第五卷 pp.185-186
- 20) イ・ヨンスク『「国語」という思想 近代日本の言語認識』岩波現代文庫 2012 p.10
- 21) 同書 p.11
- 22) 馬場辰猪『馬場辰猪全集』岩波書店 1987 英文篇 p.7
- 23) 同書 pp.7-9
- 24) 同書 pp.30-32
- 25) 大井通明編『日本全国新聞記者評判記』1882 出版人:師岡國 近代デジタルライブラリー  
コマ番号 14-15
- 26) 馬場辰猪『馬場辰猪全集』岩波書店 1987 英文篇 pp.12-14
- 27) 同書 pp.14-15
- 28) 大久保利謙監修『新修 森有禮全集』文泉堂書店 第五卷 p.342
- 29) 小林昭美「日本語千夜一話」web上のテキスト
- 30) 明治文化研究会編『幕末明治新聞全集』世界文庫 第五卷「都鄙新聞 明治元年五月發行 第一」 p.73
- 31) 明治文化研究会編『明治文化全集』日本評論社 別巻 石井研堂著『増補改訂 明治事物起原』上  
巻 p.56